

【宮崎県納税貯蓄組合連合会会長賞】

守り続けるもの

都城市立五十市中学校

三年 山下 諒晟

私は正直「税」についてマイナスな印象をもっていた。きっかけは幼少期私はおつかいを頼まれ最寄りのスーパーへ行ったことにある。頼まれた品物を買う物かごに入れ会計へ行ったところ、私が予想していた金額より少し高い金額になっていた。それに戸惑った私は、その原因は消費税だと気づいた。これが僕が初めて税と関わった出来事となった。以来、僕は「税」についてマイナスなイメージをもち、税というものがなくともいいのではと思っていた。しかし、この考えを一変させる出来事が起きた。二〇一六年に発生した熊本地震である。

当時震源地となった熊本には、祖父母が住んでおり、無事かどうかとても心配したことを今でも鮮明に覚えている。被災した祖父母の家を訪れた時、以前の温かい家の面影は少しもなく、地面は割れあちこちにヒビが入り、見るも無惨な姿となっていた。そんな心身共に疲れていた祖父母を助けたのが「税」であった。半壊した家の解体費や新しく建て直す費用の一部、仮住まいの家まで被災した祖父母達を経済的に援助してくれたのだという。そこで、私は税のもつ本当の意味を知ることになった。私が何気なく払っている消費税を医療や福祉、被災地の援助費などといった公共サービスに使われていることを知り、私も間接的に祖父母の力になったのだと思うと嬉しかった。それからというもの税のイメージは私の中でみるみる変化し、日本と国民を支える支柱のような大切な存在だと気づかされた。

私達が日常生活で普段意識することがあまりないが、しかし誰もが関わっている「税」。その背景には国が熟考して考えた日本、そして私達一人一人の生活を安定させる重要な役割を担うシステムだったのだ。何十年、何百年と続いている税、それは人々が積みあげてきた悠久の研さんということを忘れてはならないだろう。そして、その「税」の根源は人一人として不幸せにならないようにするための思いやりだと思う。

十五才になったこの夏、久しぶりに私達は熊本の祖父母の家に帰省した。そこには、税によって守られた笑顔とよりいっそう温かくなった家が私達を待っていた。